

【寄稿】07年度夏期海外研修・国際交流奨励制度 学生体験記

今年度夏期海外研修・国際交流奨励制度生の2学生から届いた体験記を紹介しよう。この制度は夏(前期)と春(後期)の休みを利用して語学研修やボランティア、体験旅行などを希望する学生や団体に奨励金を支給するもので、これまで多数の学生が参加している。

韓国・春川でボランティア活動

平野 進<経営2>

盲学校の子供たちに日本文化を紹介

この夏、韓国で行われた盲学校でのボランティアプログラムに参加しました。応募した理由は、現在、勉強している韓国語の上達を目指すこと、他の国から来ているボランティアたちと会って、お互いの文化について話しあったりすること、韓国の文化について直接触れてみることでした。

春川(ソウルから電車で約2時間。「冬のソナタ」のロケ地として有名)にある明震盲学校で、他の国から来ているボランティアたちと一緒に、生徒たちに英語で自分たちの文化の紹介などをしました。子供たちの中には、完全に目の見えない子から視力にまったく問題がない子もいてさまざまでした。

会話はとくに問題がなかったものの、自分の英語力のなさを実感したような気がします。充実した毎日で、お互いの国の言語を教え合ったりしたので、非常に楽しかったです。大学で韓国語を勉強している自分にとっては、これ以上ない良い機会で、勉強にもっと力を入れていこうというモチベーションを与えられました。

ボランティアの前の数日間は、ソウルで市内の有名な建物や博物館などを見学しました。どことなく日本と似ていて、この半島から文化が伝わってきたのだと実感させられました。

韓国人は反日感情を持っていると言われますが、そういった感情が根付いているとは、あまり感じられませんでした。ただ、町のいたるところに韓国の国旗が見られ、国民の愛国心が強いことは日本との大きな違いでした。

実際に思っていたことと違っていたりして、今回の旅は自分にとって大きな経験となりました。これらをベースに成長していくのだと思うと、この制度に感謝せずにはいられません。

この経験を生かし、残りの大学生活もがんばりたいと思います。



▲春川の明震盲学校で子供たちと交流する平野さん(後列右端)



▲さまざまな海外のボランティア・メンバーと一緒に

【寄稿】07年度夏期海外研修・国際交流奨励制度 学生体験記

収入の差6倍、都市との格差実感

松原 武史<経営2>

インドの農村でスタディーツアー

国際協力に関心があり現在、「地球の友と歩む会」というNGOでインターンシップをしています。前々から現地でのNGO活動を見てみたかったので、夏にインターン先のNGOが行っているインドでの農村開発研修というスタディーツアーに参加しました。この研修は農村開発に関心のある学生を対象としたもので、大学でのレクチャーやフィールドワークを通して農村開発について深く学ぼうという趣旨です。

フィールドワークで農村を訪れる機会があり、都市と農村のギャップ、貧富の差に驚かされました。チャイ(非常に甘いミルクティー)というインドの代表的な飲み物があるのですが、都市では農村の5倍で売られていました。農村では6円ほど。日本人にすればどちらも安いですが、現地で5倍の差は大きいです。農村では仕事不足が深刻で、農業ができない時期にほかの仕事をしたくてもできず、1日に2食も食べることでできない人々が全人口の1割もいます。

インドの人口の約6割が農民ですが、GDPから見ると、農業とITに代表されるサービス業とは大きな差があります。単純計算するとサービス業で働いている人は農民の約6倍の収入を得ていることとなります。

インドの物価の安さには驚きます。ホテルのバイキングでさえ180円程度。タクシーは1時間走っても200円もかかりません。しかし、現地の人々にとっては決して安くありません。農村では6円でも貴重な収入なのです。

インドは今、急成長し、物価もどんどん上昇していますが、半数以上のとくに農村の人々の収入に変化があるわけではありません。生活は苦しくなるばかりでしょう。

『世界がもし100人の村だったら』という本にあるように、世界では多くの人が貧困に苦しんでいます。話で聞くと実際に体感するのは全く違いました。

すばらしい仲間と出会え、とても“濃い”2週間でした。本当に良い経験ができたと思います。



▲マドゥライのダーンアカデミーの研修施設で(後列左から3人目が松原さん)



▲貧しくても笑顔を絶やさない、農村の子供たち

キャリアデザインセンター

課題解決型インターンシップの成果を発表

3つのゼミがプレゼンテーション

キャリアデザインセンターが川崎市との連携で企画した「課題解決型インターンシップ」に取り組んだ学生たちの研究成果発表会が生田キャンパスで開催された。

9月26日は、川崎に本社を持つ印刷技術のサインコミュニケーションサポート事業会社(株)アクトに池本正純経営学部教授のゼミ生8人が3つのグループに分かれ、「絵や写真への適用～他企業との連携～」 「ペット用品固定シート」 「貼る消臭・芳香剤」とそれぞれ新規用途提案を行った。

アクトと川崎市担当者からの鋭い質問に発表者は、研究の中身を掘り起こしながら答えた。

10月2日には、アミューズメントマシンの製造・販売を手がける(株)ホープに2ゼミが新商品開発のアイデアをプレゼンテーションした。

渥美幸雄経営学部教授のゼミ生は「知育」をテーマに「親がやらせたいと思うゲーム」を提案。石川和男商学部准教授のゼミ生はデパートなどでの市場調査で業界の傾向、ホープの製品ラインナップなどの研究から、「身体を動かして遊ぶゲーム」をそれぞれ提案した。ホープ側から「しっかりした市場調査に基づいた提案で感心した」という感想が聞かれた。

キャリアデザインセンター長でもある池本教授は、「予想以上の成果。今回の経験を今後の“学び”に生かしてほしい」と講評した。



▲「身体を動かして遊ぶゲーム」を提案した石川ゼミ

活性化に経済・徳田ゼミ生が協力

空き店舗を活用した「長沢ひろば」(多摩区)

徳田賢二経済学部教授のゼミ生たちは、「課題解決型インターンシップ」で、多摩区・長沢地区の商店街の活性化に協力している。

神奈川県と川崎市の「空き店舗活用事業」などの支援を受けて、住民と商店会の有志が立ち上げた「長沢まちづくり協議会」が運営する「長沢ひろば」に、人が集い、思わず入りたくなるようなイベントを学生らしい感性で企画。これまで、「1日限定漫画喫茶」、「地元の昔と今を比べる写真展」、「うどん学で学ぶ経済学」を実施した。

「地域経済」を専門とする徳田ゼミ生が、今後どのような企画を実現していくか、注目が集まっている。長沢ひろばホームページ(<http://www.n-hiroba.net/>)



▲1日限定漫画喫茶



▲写真展を担当したゼミ生たち



▲うどんづくりにチャレンジする子どもたち